

1 秋風の札幌大路／旅人が白き衣のうらさびしけれ 石樽千亦

「旅人」は作者自身であろうか。作者の住む内地はおそらくまだ残暑の季節なのだが、秋風の吹く札幌では、白い服はもう季節はずれなのだ。本来さわやかで明るいイメージの白だが、周囲から浮いてしまつて、かえつてさびしい感じがする。秋がさびしいのではなく、周囲からずれてしまつている自らの存在がさびしいのだ。

2 ぼつかりと月のぼる時森の家の寂しき顔は戸を閉ざしける 佐佐木信綱

この歌にいう顔は、家の中にいる人の顔という解釈も可能だろうが、家そのものの顔と理解したい。二つの窓が目で、戸が口という、メルヘンの世界の家だ。そして、月が昇る時、「戸を閉ざしをり」ではなく「戸を閉ざしける」であることに注意したい。つまりこの家は、月が昇る前から口(＝戸)を閉じていたのではなく、月が昇った時に口を閉じた。裏返せば、その時までには口を

開いていたのである。さびしく何かをつぶやいていたのだろうか、月の光に照らされてあわてて黙つた。結句を「閉ざしけり」と終止形にせず連体止めにして余韻を持たせているので、家は程なくまた語りだすと予感が漂う。

3 ただ一つこれただ一つなし得べき道とは知れど心おくれぬ 橘糸重

作者はピアノリストなので、「ただ一つなし得べき道」とはピアノを弾くことに違いない。自分にはこの道しかないとは理解しているけれど、道を間違つたのではないかという疑念が心のどこかに存在している。「ただ一つなし得べき道」と一言言えば意味は通ずるが、あえて「これただ一つ」と繰り返しているところに、納得できない自分に重ねて言い聞かせているような苦しさを読み取れる。

4 たてよこにうねりくねれる学者町小さき家の人にかしづく 大塚楠緒子
作者の夫は美学者の大塚保治。住んでい

た町には学者が多かつたのだろう。歌は、楠緒子の感じていた鬱屈した心情を詠つたものともとれるが、それほどシリアスな歌と解する必要はないのではないか。「たてよこにうねりくねれる」は町の構造であるとともに、町に住む学者同士の間関係の難しさにも通ずる。「私、七面倒くさい学者ばかり住んでる町の小さな家で、学者の夫にかしづいて暮らしてます。」と、現代で言えば自虐ネタのような軽いものとして読むのがいいのではないか。

5 わが側に人あるならねどあるやうに一つりのりんご卓の上に置く 片山広子
孤独感を詠つた歌であることは分かる。しかし、あたかも側に人がいるように卓上にりんごを置くという行為は何を意味するのか。誰かが側にいると想像して孤独を癒すため、と安易に考えてはならないだろう。むしろ逆で、作者はこの行為を通じて、やはりわが側に人はいない、自分は孤独だと確かめていると解する。一見自虐的にも